



検尿からワイドショーまで

北里大学医学部小児科学教授

石倉健司

まず検尿の試験紙をイメージしてください。蛋白がマイナスとか、2プラスとかあります。だれでも検査でき、判断も容易で便利です。でもあれにもいくつか限界があります。半定量検査であり、厳密な検査で無いことがその一つです。判定の段階ではさらに単純化し、蛋白が無いかあるかで分けられてしまい（定性）、無罪放免かその後の検査に進むか決定されます。でも本当に大事なものは、蛋白尿のあり無しではなく、蛋白尿があるとすればどの程度なのかです（定量化）。あわせて、健康な方との比較や多いとすればその理由を考えるのが検診後の医療者の仕事です。

話は変わりますが、ワイドショーで驚くほど多くの医学情報が流れるようになりました。しかし大事な視点が抜けている事が殆どです。それは、検尿でも重要な定量化や他との比較、そして最も不足しているかもしれないのが寛容さです。

例として、ワクチンの接種で様々な人為的なトラブルが報告されました（本稿が出る頃には解決しているでしょうか？）。一日に2度接種した、濃かった、薄かった、温度管理が不適切、そして無駄に廃棄した…では、一日約100万回の接種で、どの程度（割合）の事象なのか、ワクチンを積極的に進めている他国（例えば、中国、アメリカ、イスラエルなど）でどのくらいこの事象が起こっているのか、殆どの場合それらの情報が欠けているのです。あわせて寛容さありません。医療者を応援するといっていますが、ミスは許しません、という感じです。

今回世界一ワクチン接種が進んだイスラエルのワクチン政策の原則に、「失敗を非難しない」という項目があったそうです。COVID-19のパンデミックは類を見ない事態であり、これだけ短期間で大人数に行うワクチン接種もおそらく人類史上初でしょう。日本全国で毎日100万人に対して慣れないことを行えば、様々な事が起こって当然です。廃棄だって1%（100万接種なら1万人分）くらいはあっても良いのではないのでしょうか。その1%をなくすために精密なシステムを構築する間に、貴重な人命や医療資源が浪費されかねません。アメリカの映像では、気軽にどんどん余ったワクチンが捨てられていました。

我々医療者が、まずは定性的な報道に対して冷静な視点を持ち、間違った誘導に対しては毅然と対応していく、でも寛容さは忘れない。そのような気概があるべきだと感じています。そして、ワクチンが多くの人にゆきわたり日常が戻ってくる。この文章が皆さんの目にとまる頃には、そんな日本になっていることを願っています。

2021.7 執筆

2021.9 掲載